

ナボコフの短編『ある日没の細部』 ——その細部をめぐって——

毛利公美

1. 序

ナボコフは自作を翻訳する際、原作にしばしば自由な改変をほどこしている。多くの場合、英語版に加えられた変更は、ロシア以外の読者を配慮してロシア独特の表現や事物に説明を加えたり、作品に描かれた時代を明確にしたり、曖昧な比喩をより明確にするものであり、ロシア語版と英語版を比較することでナボコフが意図したことをより正確に理解することが可能である。

ナボコフの13番目の短編に当たる『惨劇 (катастрофа)』¹は1924年6月半ばにロシア語で書かれ、リガの日刊紙「今日」1924年7月13号に掲載された²。その後、1976年に英訳した際、ナボコフはこの短編に『ある日没の細部 (Details of a Sunset)』という新しい題を与え、英訳に添えられた前書きで、タイトルの変更について次のように説明している。

この短編にはもともと不愉快な題名（「惨劇」）が科されていたが、それが私の責任なのかどうかは、大いに疑わしい。【中略】

この短編に私が今度つけた新しい題名は、三つの利点に恵まれている。物語のテーマ的な背景に呼応していること、「情景描写を飛ばし読み」するような読者を戸惑わせるに違いのないこと、そして、評論家たちを激怒させることである。（E16）

ナボコフはしばしば作品の序文のなかで作品や個々の表現に秘められた象徴的な意

¹ 本稿のテキストとしてはロシア語版 *Набоков, Владимир. Собрание сочинений в четырех томах. М: «Правда». 1990. Том 1, сс. 368–374*; 英語版 *Nabokov, Vladimir, Details of a Sunset and Other Stories, New York: McGraw-Hill, 1976, pp. 16–26* を用いた。引用の際には邦訳の後に英語版 (E) ロシア語版 (R) それぞれのページを数字で添えた。また、強調はすべて筆者のものである。

² Boyd, Brian, *Vladimir Nabokov: Russian Years*, Princeton: Princeton University Press, 1990, p. 560.

味合いを強調したり、読み方のヒントを示唆したり、逆に特定の解釈（主にフロイト的な）を否定したりすることで、作品に隠されたモチーフが読み飛ばされたり不本意な解釈をされたりすることを防ぎ、安易な読者や批評家を煙に巻こうとする。この序文は何を示唆しているのだろうか。

短編に与えられたタイトルは、「芸術においてはディテールがすべてである」¹といったナボコフの言葉を即座に思い起こさせる。彼は自分の学生たちにむかって常々「ディテールを愛撫せよ」と語っていたという²。では新しいタイトルの「日没」とは何を意味するのか。序文でナボコフが語っている「テーマ的な背景」とはなんだろうか。「情景描写を飛ばし読み」せず、短編の細部をじっくり眺めることによって、新しく与えられたタイトルの意味を考えてみたい。

2. 運命づけられた「惨劇」

最初に述べたように、この短編のロシア語版のタイトルは『惨劇』である。まずはここに描かれた「惨劇」のあらましを整理してみよう。

主人公マルク・シュタントフスは、愛するクララとの結婚を一週間後に控え、二人を祝うために友人たちが開いてくれたパーティーから幸福と酒に酔いしれて帰宅するところである。恋に目がくらんだマルクにはまわりのすべてが幸福にあふれて見え、母がもらす懸念にも全く耳を貸さない。しかしその翌日マルクが仕事に出かけている間にクララの母がマルクの実家を訪れ、クララが昔の恋人とよりを戻してマルクとはもう会いたくないと言っていると告げる。一方、仕事を終えたマルクは家にいったん帰るつもりだったが、友人に誘われて一杯つきあううちに遅くなり、直接クララのところへ行くことに決める。そしてその途中で交通事故に遭って足を切断され、危篤状態でしばらく夢と現実の間をさまよったあと死ぬ。

短編の原題『惨劇 (катастрофа)』は、主人公マルクの身にふりかかる不幸を表している。彼は失恋と事故による死という二つの悲劇に同時に直面するのである。マルクが通り掛かった空き地に停めてあるトラックの積荷についての描写は、マルクに運命付けられたこれら二つの悲劇が並行して描かれていることを象徴的に表している。トラックは二度登場する。一度目は死の前夜、マルクが酔って帰宅する途中の次のよ

¹ Nabokov, Vladimir, *Strong Opinion*, New York: 1973, p. 168.

² Wetzsteon, R., "Nabokov as a Teacher" in *Nabokov: Criticism, Reminiscence, Translations and Tributes*, Evanston, 1970, p. 245.

うな描写である。

黒い塀の向こうの、建物と建物の間には、四角い空き地があった。そこには、巨大な棺のような貨物トラックが数台とまっていた。トラックは積荷で膨れ上がっていた。いったい何が積まれていたのかは、神のみぞ知るところだ。おそらく、オーク製の旅行用トランク、それに鉄製の蜘蛛のようなシャンデリア、それにダブルベッドの重たい骨組といったところだろうか。月がトラックの上にゆるぎない光をおとしていた。左手にある建物の裏手のむきだし壁には、巨大な黒いハートがいくつもびったりと張り付いていた。歩道の端の街灯の近くに立っている菩提樹の葉の、何倍にも引き伸ばされた影だ。(R369/E18)

「巨大な棺」に喩えられたトラックの中にある「ダブルベッドの重たい骨組」とは、マルクとクララの結婚生活を象徴するものであり、つまり、この描写は二人の関係の終わりを暗示しているものといえる。また、壁に投影された「巨大な黒いハート」のような菩提樹の葉の影はクララの裏切りを暗示し、二人の関係に不吉な印象を強めている¹。

このトラックが二度目に登場するのは、マルクがすでに事故に遭った後である。

トラックは巨大な棺のように置かれていた。いったい中に何が隠されているんだろう？宝物かな、巨人の凱骨かな？それとも豪華な家具が埃をかぶって山になっているのかな？

「そうだ、見ておかなくちゃ…。そうしないと、クララに聞かれても、わからないからな…。」

マルクは一台のトラックのドアをすばやく押し開けて中に入った。空っぽだ。ただ、真ん中に、小さな籐の椅子がひとつつきり、三本足でおかしなふうに傾いで立っていた。(R372/E24)

ここでマルクが見たと思っているトラックの中身は、実は意識不明の状態での病院のベッドに横たわっているマルクの頭の中に描かれた想像であり、三本足で傾いた椅子は、足を切断されたマルクの痛みがこうした形を取って現れたものとも考えられる。しかし、読者にはマルクが致命傷を負って病院に運ばれたことを結末近くまで知らされないため、描かれていることが本当に起こったことなのかマルクの想像なのかが曖昧

¹ 主人公の身の上によくないことが起こる前の情景描写の中に、菩提樹の葉の影が同じように象徴的に描き込まれている例として、短編『おとぎ話』などをあげることができる。

味になっており、ここでの描写は暗示的な意味を強く帯びている。足の一本足りない椅子は足を失ったマルクを象徴し、それがやはり「巨大な棺」に喩えられたトラックの中にひとつつきりで置かれているということは、クララに捨てられたマルクの孤独な死を暗示している。

ちなみに、この短編の主人公マルクはシュタントフスという苗字を与えられている。ナボコフの作品では、登場人物の名前に象徴的な意味が与えられることがしばしばある。ドイツ語で「フス」は「足」を、「シュタント」は「立つ」を意味する言葉であり、マルクの苗字には事故で足を失うマルクの運命が暗示されている。

二つの悲劇は同じ日におこる。マルクが友人に付き合わなければ、あるいは友人と別れた後、直接クララのところに行かずに家に寄っていれば、彼はおそらく事故に遭うこともなかっただろう。しかしその代わり彼は母親からクララの心変わりを聞かされていたはずである。クララの愛を信じて疑っていないマルクにとって、クララが本当は自分を愛していなかったという事実は、背後からぶつかってきたバスと同じくらい突然の致命的な衝撃だ。つまり、どっちに転んでもマルクは不幸を逃れることはできなかったということになる。マルクには「惨劇」が運命付けられているのである。ナボコフがこの短編に最初につけたタイトルは、物語の主人公マルクの運命を示唆していることができる。

3. プロセスとしての「惨劇」

次に、新しいタイトルの意味について考えてみよう。

物語は、惨劇が起こる前の晩から始まる。惨劇が起こるまでの描写は、マルクに運命づけられた二つの悲劇を暗示させる様々な予兆に満ちている。先に述べたトラックの積荷についての描写もそのひとつとみなすことができるが、悲劇を暗示する箇所は他にもみられる。最も端的な例は、マルクが死の前夜に見る夢である¹。夢の中に亡くなった父親が現れ、彼をつかまえてくすぐり始め、なかなか放してくれないのだ。マルクはその翌日、工作中に夢の内容をふとしたことで思い出し、「一瞬、心の中で何かがぱっと開いて、驚いたように凍りつき、またパタンと閉まった (R370/E20)」。

来たるべき事故をより具体的に暗示しているのは、悲劇の前夜に酔って帰宅するマルクの様子を描いた、次のような一節である。

¹ 夢が暗示として用いられる作品の例は他にも短編『忙しい人』などいくつか挙げられる。

暗い階段を自分の階まで登っていくあいだも、マルクはまだときどきくすくす笑いをもらっていた。最後の一段を上がったというのに、マルクは間違えてもう一度足を上げてしまい一ぎこちなくどすんと音を立てて足をついた。暗がりの中で鍵穴を探してドアを手探りしているうちに、竹のステッキがわきの下から滑り落ち、コンコンと軽く音を立てながら、階段を下に落ちて行った。マルクは息をひそめた。ステッキは階段の曲がり角のところで向きを変えて、一番下までコンコンと転がり落ちて行くぞ、そう思った。しかし、甲高い木の響きはふと途絶えた。止まったってわけだな。マルクはほっとしてにんまりと笑みを浮かべ、手すりにつかまって（ビールがうつろな頭の中でガンガンがなっていた）、もと来たほうへ下り始めた。すんでのところで転びそうになって、両手であたりを探りながら、階段にどすんと腰を下ろした。（R369/E18-9）

このシーンは、マルクの命を奪う交通事故の前触れとして見ることができる。上の引用で、深夜に帰宅したマルクは階段一段分よけいに足をあげてしまうが、これは翌日の事故の前に彼が停留所を乗り越すという形で繰り返される。市電を乗り越してしまったマルクは慌てて席を立ち、降車口に向かうとき、今度は座っている紳士の足につまずき、帽子を取って謝ろうとしてやはり転びそうになる。何度も躓いたり転びそうになるマルクの頼りない足取りは、酔って帰宅する様子を描いたマルクの足取りと重なる。そしてなんとか態勢を立て直して走行中の市電から飛び降りた直後に、彼は背後からやってきたバスに撥ねられる。

ここでまた、マルクが取り落とすステッキ¹は、マルクが市電から飛び降りて事故に遭うことを、そして階段をコンコンと落ちていって最後にふと途絶えるステッキの音は、事故の後しばらくマルクの意識が妄想を続けた後で途絶えることのメタファーとみなすこともできるだろう。マルクがバスにはねられる瞬間は次のように描写されている。

おかしいことがいくつか同時に起こった。マルクから揺れながら遠ざかっていく車両の前の部分から、車掌がすごい剣幕で何かを叫んだ、きらきら光るアスファルトがブランコの板のようにせり上がった、轟音をたてる巨大な塊が後ろからマルクにぶち当たった。マルクは

¹ ナウマンは、マルクが持っているステッキは「酔った彼の足取りを強調する」と指摘している。Naumann, Marina Turkevich, *Blue Evenings in Berlin: Nabokov's Short Stories of the 1920's*, New York: New York University Press, 1978, p. 182.

まるで太い稲妻に頭からつま先まで貫かれたように感じたが、その後は、なんともなかった。

(R372/E23)

「なんともなかった」というのは、マルクの思い込みにすぎない。これ以降の数ページにわたって描かれるのは危篤状態のマルクの頭の中で描かれた妄想だが、それがはっきりするのは結末でのことであり、その間、マルク自身にも、そして読者にも、マルクが致命傷を負ったということは明らかにされない。

同様に、マルクのもうひとつの不幸であるクララの心変わりについての報せは、マルクの留守中にもたらされ、友人に誘われたり事故に遭ったりという様々な運命のいたずらによってマルクの耳から遠ざけられ、結果的にマルクはクララが婚約を破棄したことを知らされぬまま死んでいく。そして死の直前になって、一瞬のあいだ意識を取り戻した彼は、クララがそばにいないことに気づく。

マルクは、疲れた、眠りたいと思った。クララの首に手を回して抱きしめ、抱き寄せ、後ろにもたれかかった。とそのとき、ふたたび痛みが押し寄せ、そしてすべてがはっきりした。

マルクは包帯を巻かれ、足を切断されて、仰向けに横たわっており、ランプはもう揺れてはいなかった。例の口髭を生やした肥った男、今や白衣の医者だったが、マルクの瞳孔を覗いて、気遣わしげに小さく唸った。それになんという痛みだろう…！ああ、心臓が今にもあばら骨に刺し貫かれて破裂しそうだ…ああ神様、今にも…。そんな馬鹿な。なんでクララはここにいないんだ…

医者は眉をひそめ、舌打ちした。

だがマルクはもう息をしていなかった。(R373-4/E25-6)

下線部の「なんでクララはここにいないんだ…」というマルクの思考は疑問文の形で書かれているが、文は疑問符で締めくくられぬまま途切れており、ナウマンが指摘するように、マルクはこの瞬間、つまりクララがいないという事実¹に思い至った瞬間に死んだと考えることができる¹。マルクは間近に迫ったクララとの結婚生活を夢想し、「一生の間ずっと続く幸せと平和」を信じているが、彼の夢想はこうして皮肉に

¹ Naumann, *Ibid.*, p. 185. 「疑問符が書かれていないことは重要である。この瞬間にマルクは死んだのだ」。ナウマンはマルクが「交通事故と死のおかげで心痛から救われた」と解釈している。

実現する。クララがいないことに気づき幸福が終わりを告げた瞬間、彼の一生は終るのだから。こうしてマルクに運命付けられた二つの悲劇は同時に終局を迎えるのである。

主人公の運命や生命を決する悲劇のクライマックスは物語の最後におかれるのがふつうだが、ナボコフのこの短編では、物語はそれらの致命的な悲劇の予兆に満ちた前夜の描写にはじまり、その後、マルクにとって物語の中盤でふたつの悲劇（失恋、事故）が起こる。しかし、すでに述べたように、悲劇はすぐに結末を迎えるのではなく、曖昧なまま物語の終わりまで引延ばされる。短編の新しい題に含まれた「日没」という言葉は、マルクという主人公の恋と命の終わりを象徴していると言えるが、ここで重要なのは、「日没」という言葉が、太陽が傾いてから沈むまでの長い時間帯を表すということである。この短編は事故から短編全体が、惨劇の予兆から終焉までをひとつの長いプロセスとして描いているのである。

4. 光に照らされた「鏡のような」闇

日没とは、太陽が地平線に沈み、光が消えていく時間帯である。マルクの恋人のクララという名前は光や明晰さを象徴している。マルクの意識は生死の淵をさまよう中で次のような妄想を描き出す。

するとクララの緑のワンピースがふわふわ流れ出し、小さくなって、緑色のガラスのランプシェードに変わってしまった。ランプはコードに吊り下がって揺れていた。マルク自身はというと、その下に横たわっているのだった。（R373/E25）

クララのはいている緑のスカートが緑のランプシェードになるということは、クララは電灯、光に等しいものだということを表している。マルクにとってクララの存在は幸せの中心であり、光なのである。「日没」という言葉の裏には、マルクがクララという光を失うという意味合いも込められていると考えられる。

一方、主人公のファーストネームである Марк（マルク）は мрак（暗闇）の綴り替えであり、英語の murk（暗黒）と響きあう。主人公のマルク（闇、暗黒）という名前は、彼が恋に夢中になるあまりに盲目になっていることを暗に示している¹。

物語の冒頭は次のような一文ではじまる。

¹ 恋に盲目になって不幸になる男を描いた作品としては他にも『暗闇の中の笑い』などがある。

通りの鏡のような闇の中へと最終の市電が走り去って行き、その上の電線沿いに、瑠璃色の星のようなベンガル花火の火花が、ぱちぱちと音をたてて震えながら、遠くへ走り抜けて行った。(R368/E17)

雨の後に濡れた路面が街灯の光を反射して鏡のように光る様子を表す「鏡のような闇」という表現は、ロシア語では зеркальная мгла、英語では mirrorlike murk となっている。英語で暗闇を表す一般的な語 darkness ではなく文語的な murk が用いられているのは、表現を詩的に高めるといった文体的な効果に加え、murk と Mark の響きを重ねることによって「鏡のような闇」＝「鏡のようなマルク」という二次的な意味を込めるためだと考えられるのではないか。

ナボコフの作品において鏡は分身や創作のテーマにつながる重要なモチーフのひとつである。この短編も例外ではない。この作品は三人称で記されているが、物語は基本的にマルクの視点で語られる。短編の物語世界はマルクの目に映った世界、マルクの意識の中にある世界である。闇であるマルクはクララという光を受けて鏡となり、世界を映し出すのだ。しかし「鏡のような闇」であるマルクの恋の幸せに曇った目で見えた世界は、マルクの認識を反映してゆがんでいる。クララの涙はマルクにとっては「幸福の涙」でしかあり得ないし、「クララの顔色がうろたえたように青ざめていたのもやはり幸せのせい」としか理解できない。不安な要素のことごとくがマルクの幸福にあふれた意識によって主観的な解釈を与えられ、肯定的に解釈される。こうして彼は自らの不幸を否定するために、世界を自分に都合の良いように変えてしまおうとするのである¹。

不可思議なクララの態度をすべて肯定的に解釈し、彼女が本当は自分を愛していないという事実を受け入れなかったように、マルクは自分が致命的な事故にあったという事実をも認めようとせず、彼の意識は致命傷を負った肉体から離れて分身となる。

彼はてかてかするアスファルトの真ん中に一人で立っていた。あたりを見まわした。遠くに自分の姿、マルク・シュタントフスの痩せた背中が見えたが、それは何もなかったように

¹ 様々な暗示をすべて自分の都合の良いように歪めて解釈し、自分の負けを認めたくないあまりに分身を作り出す主人公は、『密偵』のスムーロフを思わせる。しかし、スムーロフの場合、分身はかなり意識的に作られたものであり長く持続するのに対し、マルクの分身はほんの一瞬の間しか続かない。

通りを斜めに横切って行くのだった。驚いたマルクは軽くひとつとびで自分自身に追いつき、すると今度はもう自分が歩道のほうへ歩いているのだった。そして全身を満たす振動は次第におさまっていった。

「やれやれとんでもない。もう少しでバスに轢かれるところだった……」 (R372/E23)

引用はマルクが事故に遭った直後の描写である。これ以降の描写は意識を失ったマルクの妄想であり、マルクの妄想が文字通り「一人歩き」するのだ。こうしてマルクの意識は、死んでいく肉体から離れて独自の現実を作り出し始める。

主人公マルクは短編の冒頭で「半神半人」と表現される。ロシア語では *полубог*, 英語では *demigod*——どちらも、神のように崇められるヒーローを指す言葉である。恋人に捨てられ、自らの不注意がもとでバスに轢かれて命を落とすマルクに、この形容辞は不釣り合いに感じられるが、この言葉の背後に示唆されているのは、「デミウルゴス」、作品に君臨する全知の神としての創造主である。この短編で語られるのはマルクの間から見た世界であり、とくに事故に遭ってからの描写は瀕死のマルクの意識が生み出した世界だが、それはしょせん妄想にすぎない。マルクは鏡のように世界を映すことができるだけであり、世界そのものを作りかえることはできない。彼は「半神」でしかないのだ。

5. ナボコフの多層的世界

作品の結末は「マルクは行ってしまったが一どんな夢の中へなのか、それはわからない」という一文で締めくくられる。つまり、この物語は誰か（物語世界の作者）が見たひとつの夢であり、マルクはその夢の中の住人としてしばらく生きた後、また別の作品の登場人物として現れるべく去って行ったのだ。作品をひとつの夢、作品世界の登場人物をその夢の世界を訪れる旅人とし、物語の結末を主人公の旅の終わりや新たな世界への旅立ちとして描くのは、ナボコフがよく用いた手法である¹。様々な比喩や複雑な語りの構造を用いてナボコフが明らかにしようとしたのは、世界の多層性である。世界は単一ではなく、我々の生の向こう側には、別の世界（彼岸）がある。そして我々の世界の内部には、様々な物語がある。

ナボコフは、作品世界の内側や外側に別の世界を作り出し、世界をつねに多層的な

¹ こうした結末をもつ作品の代表として短編『雲、湖、城』や『オーレリアン』などが挙げられる。

ものとして描きだした。作品世界の登場人物の妄想や創作した世界は、作品世界の内部に存在するもうひとつの世界として提示される。一方、作品の外側にはもうひとつ上の次元の世界が存在する。それは作品世界の「彼岸」にあたる世界であり、作品を創造している作者の領域に属する世界である。それら複数の世界は同時に存在し、様々なモチーフによって結び付けられている。ナボコフの作品の中にしばしば見られるいくつかの特徴的なモチーフは、作品の外側や内側に存在する別世界を映し出したり、別世界からの使者としてなんらかのメッセージを伝えるために用いられる。

ナボコフの作品世界の中で別世界を映し出すものとして最もしばしば登場するのは、鏡と水溜りである。これらふたつはどちらも我々が身を置く現実世界とは異なる世界を映し出すものだが、両者の意味合いには大きな違いがある。鏡は現実に対するものとして虚構の世界を映し出し、創造のテーマに関連して現れ、しばしば分身や狂気のテーマにつながる。すでに述べたように、短編『ある日没の細部』の内部にある別世界は、マルクの意識が創り出した妄想であり、現実とずれた彼の妄想は「闇のような鏡」という表現に集約されており、「鏡」として導入されたマルクの自意識は、事故の後、自己の分身を創り出した。

一方、ナボコフの作品において、水たまりは現実世界のひとつ上の次元に存在する彼岸の世界を映し出すものとして描かれる。事故に遭う前、マルクがクララのところへ向かう途中の街の情景描写のなかには、次のような一節がある。

まだ乾ききっていない水溜りは、黒っぽく湿ったあざに囲まれて（アスファルトの生きた目というわけだ）、やわらかな夕方の光を映していた。建物はいつもと同じ灰色だったが、その代わり、屋根や、最上階の上に施した飾り、金色の避雷針、石の丸屋根、小さな柱飾り—それらは昼間は誰も気がつかないもの、というのも昼間の人間というのは上を見上げることがめったにないからだが、—それが今は、鮮やかな黄土色の輝きと、夕暮れ時のふわりとした暖かさを一面に浴び、それゆえこれら上の階の張り出し窓やバルコニー、カルニース、円柱は、その黄色い鮮やかさで、下のほうのくすんだファサードときっぱり隔たって見え、魔法のように思いがけないものを感じられた。（R371/22）

ここで「生きた目」¹に喩えられる水たまりは、夕暮れの景色を映しだし、その思い

¹ この「目」の比喩は、半年ほど後に書かれた短編『クリスマス』の結末で羽化する蛾の「目のような」模様が、息子を失った悲しみのあまり生きる希望を見失ったスレプツォフの目を開

がけない美しさに気づかせる。

ナボコフの多層的世界においては、鏡や水溜りといった別世界を映し出す事物のほかに、複数の世界を行き来するいくつかのモチーフがある。ナボコフの作品の中で彼岸からの使者として現世に現れるものの代表はおそらく蝶だろうが、短編『ある日没の細部』に関連して指摘しておきたいのは、ナボコフの作品にしばしば副次的登場人物として現れる「外国人」である。ナボコフの作品において「外国人」は、作品世界の創造主たる作者の意志をうけて作品世界の登場人物の寿命を決定したり、作品世界を夢想する人物として描かれることがある¹。つまり、「外国」とはしばしば現世の外側にある彼岸を表し、「外国人」は作品世界の上にある作者の領域からやってきて作品世界の登場人物の運命を決定するのである。

『ある日没の細部』でマルクから婚約者のクララを奪うのは、クララの家を下宿していた外国人である。このマルクの恋敵は、他の登場人物の口を通して存在が語られるだけで、物語の中には登場しないが、マルクの運命を左右する重要な人物である。

マルクは死ぬ直前、「外国人は川で上述の祈禱を行っている…」という奇妙なうわごとをつぶやく。この中の「祈禱を行なう」という表現によって、外国人はいわば作品世界の神の僕である司祭の役割を帯びる。シュライヤーはマルクのうわごとはヨルダン川におけるキリストの洗礼を想起させるとしているが²、シュライヤーの発想に従ってそれをさらに展開させるなら、マルクは受難する神の子として現世に遣わされたということになる。マルクのうわごとにはナウマンが指摘しているように「無意識にマルクはこの恋敵の脅威を感じていたことを明らかにする」³というだけでなく、作品世界の背後に彼岸の存在や作品の真の創造主である作者の意志をほのめかすという形而上的な意味が込められているのである。

ナボコフの作品において、日没は、しばしば予兆に満ちたものとして描かれる⁴。

かせ、自殺を思いとどまらせるという結末を思い出させる。

¹ 短編『忙しい人』では、グラフの守護聖人として作品世界に神から遣わされる隣人エンゲルスは「非常な外人」と表現される。戯曲『モーン氏の悲劇』に登場する「外国人」は、作品世界は自分が見ている夢であると語る。また『フィアルタの春』でニーナの命を象徴する蛾をつかまえるイギリス人旅行者もやはり「外国人」の一種として考えることができる。

² Shroyer, Maxim D., *The World of Nabokov's Stories*, Austin: University of Texas Press, 1999, p. 26.

³ Naumann, *Ibid.*, p. 190.

⁴ たとえば短編『忙しい人』の主人公グラフは夕暮れの風景に世界の終わりを感じとる。日没の時間帯やきらめきを秘めた夜に関するナボコフの描写は、「彼岸」についての彼の考えを反映してつねに象徴的に語られる。

それは、闇の中にある美，失われていくものの価値，死後の世界の中にあるやすらぎ，記憶の中の事物のきらめきといった初期のナボコフ作品に数多くみられるテーマに通じるものである。

上に述べてきたように、『ある日没の細部』は，一人の単純な若者が婚約者に捨てられ交通事故に遭って死ぬという一見俗っぽい筋立てをもちながら，彼岸のテーマや分身のテーマなどナボコフの後の作品で繰り返し現れる様々なモチーフが扱われており，シュライヤーの言葉を借りれば「それまで書かれた中で最も明確に“別世界 (other world)” のテーマが提示された」¹短編である。ナボコフが最初に与えた『惨劇』というタイトルは，物語のプロットを表しただけの表層的なものであった。英訳の際の解題によって，ナボコフはこの短編の背後にある彼岸の問題を前面に押し出し，細部に目を向けて隠れた構造やヒントを見つけるよう，読者を誘っているといえるだろう。

Детали «Деталей заката (Details of a Sunset)» Владимира Набокова

Куми МОРИ

Переводя свое собственное произведение, Набоков позволял себе свободно изменить оригинальный текст. Обычно такие изменения носят задачу выразить замысел писателя яснее, и поэтому, сравнение двух вариантов выясняет, что он хотел передать читателю. При переводе рассказа «Катастрофа» автор дал ему новое название “Details of a Sunset” (в прямом переводе на русский язык «Детали заката»). В предисловии к английскому изданию он пишет: «Крайне маловероятно, чтобы я был виновен в том, что рассказу навязали это одиозное название. (...) Теперь я дал ему новое заглавие, которое обладает тройным преимуществом — соответствует тематическому фону рассказа, несомненно приведет в недоумение тех читателей, которые «пропускают описания», и приведет в ярость критиков». Известно, что Набоков всегда говорил своим студентам,

¹ Shrayner, *Ibid.*, p. 25.

чтобы они изучали детали литературного произведения. Соблюдая этому совету, автор статьи пытается определить, почему Набоков переименовал свой рассказ так.

Сначала рассматривается значение первого название рассказа «Катастрофа». В нем рассказываются две трагедии героя: первая — духовная (измена невесты), вторая — физическая (авария и смерть). Как правило, катастрофа в литературе случается в самом конце, и этой же катастрофой кончается вся история. У Набокова не так. Действия рассказа можно делить на три этапа: до катастрофы, возникновение катастрофы, и ее завершения. В первой этапе описываются разные намеки обеих трагедий (в статье они подробно разбертываются). Потом две трагедии происходят одна за другой. Сначала читателям станет ясно, что Крала, невеста героя, ушла к другому. Но по воле судьбы Марк не сразу узнает об этой печальной новости, а попадает в аварии (вторая трагедия). Но опять же катастрофа не сразу завершается. Лежа в больнице смертельно раненным, Марк начинает фантазировать, и его двойник продолжает ходить по городу и обнимать невестку. Перед смертью он придет в сознание на один миг и замечает, что его возлюбленной нет рядом, но в тот же момент он умирает. Так получается, что в этом рассказе катастрофа описывается как длинный процесс. В этом и есть первое причина, почему Набоков назвал английский вариант рассказа «закатом». Ведь закат является именно таким длительным процессом, а не какое-нибудь короткое происшествие, которое слово «катастрофа» может выразить.

Кроме того, в слове «закате» скрыты и другие значения. Имя героя (Марк) — это анаграмм слова «мрак», а английское произношение этого имени имеет созвучие со словом “murk (тьма)”. А невеста, которая носит имя Крала (ясность), служит ему светом. То, что ее зеленное платье превращается в колпак лампы в его фантазии, утверждает метафор «Крала = свет». Таким образом, слово «закат» в новом названии имеет второе оправдание: закат = заход солнца, потеря света.

Закат — это переход дня в ночь. В произведениях Набокова закат равняется с переходом с одной жизни в другую, и поэтому описывается символично. В этом рассказе используются такие мотивы как зеркало, лужа как глаза, иностранец как посланник автора, которые усиливают символическое значение заката, который Набоков так удачно выбрал ключевым словом рассказа.